自然　　藤の樹と鯉の物語

藤の花が咲く時節には鯉が釣れる。この時期、釣りキチにとって藤の花は鶴首(かくしゅ)して待つ花なのである。

かつて、私の家の小庭にも藤の樹があった。小さな家ではあったが新築祝いにと戴いた鉢植えの藤の木を、地植えにしたものであった。藤の樹の枝は毎年高く伸び、近くに植えていた二本の桧葉(ひば)の木に這い登り、大きな日陰を作るようになった。ある年、その桧葉の木に雉鳩(きじばと)が巣を作り、三羽の雛を孵(かえ)した。雉鳩は藤の葉が巣を隠してくれると考えたのかも知れない。その藤の樹はそんなことにはお構えなく、二階の屋根の樋(とい)まで這い登って行った。家内はこの藤の蔓(つる)は右巻きだから珍しい花が咲くに違いないと、楽しみにし手入れをしていたのであった。

ところが、五年が経ち、十年近くになってもこの藤の樹は枝葉を繁らすものの、期待していた花は一向に咲く気配がなかった。私は鯉釣りのシーズンを近所の藤の花か、野山の藤に頼るしかなかったのである。

―ある年の私と家内の会話―

私―　この藤の樹は花を付けない種類かも知れないから、陽当りを

良くするのに根元から伐ってしまおう。

家内――　ここまで大きくなった樹を伐るのは勿体ないし可哀想よ。

それに花を付けない藤など聞いたことがありません。

と、かなり強硬である。

私――　じぁー雉鳩の雛を守った功績に免じて、もし、今年花が咲かなかったら来年伐ることにして、様子を見てみよう。

家内はただ無言であった。

それにしても、根元の周りが二十センチにもなるのに、一房の花も付けないのは「不思議な藤」という他なかった。

五月の初旬、勤めから帰った私を待っていたように、家内が「藤の花芽が大きくなっている」と告げた。私は「伐るという脅(おど)しが効いたな」と思うと同時に、どうして人間の言葉が解ったのだろうと不思議が糸を曳く様に言霊(ことだま)のことを連想させた。この不可解は「偶然！」というこれ以上はない都合の良い言葉と理屈で無理に納得させるしかなかった。

五月の末になって藤は全ての枝が満開となり近所の人たちまでが見に来た。花は純白であった。しかも、花房は六十センチを超えるものばかりだったのである。この絢爛豪華さは見事などと言う表現

ではこの藤には陳腐(ちんぷ)でしかなかった。

ところがこの藤は、さらに不思議と驚きを展開して見せたのである。作り噺(はなし)のようだが、翌年には花が咲くどころか根元から枯れてしまったのである。家内の嘆きと驚きは二十年後の今日(こんにち)も、時折話題にするくらいである。植木屋さんや樹木の専門家はおそらく何や彼やとご宣託を並べるかも知れないが、何年もの間一房の花実も持たなかった樹木が、ある年突然満開となり、翌年は呆気なく枯れてしまったのである。この出来事は不思議を超えて不気味ささえ感じさせた。

花の好きな人から、花も「綺麗」とか、「可愛い」と声を掛け続けると、見事な果実になると聞いたことがある。私はこの正反対の言葉を不用意にも投げつけたのである。以来、漠然と植物にも心があり、すべてを見聴きしているのだと思えるようにさえなった。

会津の只見川の中流に滝谷川という鯉の名所があった。長年釣りをしてきた者は、流れを見ると、濁り具合、両岸の佇まいなどで魚の種類まで透けて見えるものなのだ。この只見川と滝谷川の出合いに鯉の好む湾曲(わんど)がある。この湾曲のあるところは水深は浅いが水草が繁っていて鯉の産卵には絶好の場所なのである。鯉は確かにいる。

水草の揺れがそれを示している。野鯉（野生の鯉）は養殖したものと違って好物のジャガイモを丸呑みにし、引きは強い。釣り人が鯉釣りにのめり込む所以でもある。竿は長短二本を使うが、これは鯉道を外さないためである。短竿を投げ込み、二本目の長竿を振ったとき、誤って頭上の藤の枝先に仕掛けを絡めてしまった。藤の細枝は細工物にすると一生ものと云われるほど強い。鯉の仕掛けは竿も丈夫で糸も太い。これを藤の枝から外すのは至難である。

と、その時、先に投入していた短竿がバシャンという水音と共に水中に落ちた。暫くの間かろうじて浮かんでいる竿は、ツンツンと私を詰（なじ）るようにに本流の方に近づいて行く。この竿の先には鯉がいる。こうなると釣りに嵌った奇人は思いがけない行動をとる。衣服を脱ぐ間も惜しく、着の身着のまま竿を追いかけて水の中に入る。雪解け水は未だ冷たく水深も思ったよりも深い。竿は停止したかと思えばまた動き始める。遂に私の背丈は水深の限界まで来た。それを見届けたかのように竿は姿を消した。私は惜しいとか悔しいという感情は不思議と湧かず、静々と岸に向かった。

さて、むしろ長竿の方に難問の宿題が残っていた。藤の樹の枝に絡まった糸との遣り取りである。横に数回引いて外れない仕掛けは

縦に引いて外れることに期待するしかない。これも糸の太さからして無理がある。ままよ！と力を込めて横に引いた竿は、ハリスも道糸も切れずに穂持（穂先から第二番目の部分）が折れた。二本の竿がなくなっては釣りにはならない。このときになってやっと自分が全身濡れ鼠になっていることに気づいた。わが家の藤樹の仕返しとは考えられなかったが、この滝谷川での釣りはこれが最後となった。

私が二本の竿を失ってから暫くして少し上流に地熱発電所が出来て、その排水が川に流れ込み、川魚は酸性に強い鮠の他、棲めなくなったためである。それにしても。わが家の藤の樹と滝谷川の藤の樹と初夏の水泳、加えて、愛竿二本の喪失に因果関係は無かったのかと頭から離れることはない。

わが家にあった藤の樹は一葉の写真と幼い二本の子孫を残して逝った。我が家では二代目の若い樹の下で、藤の花の話題は禁句となっている。私の年波は鯉釣りも難儀になって来たのである。